

小学校保護者が重視する教員資質能力についての考察
—予備調査をもとにした聞き取り調査から—

Some Consideration on the Expected Competence and Ability of Teachers by
Elementary School Parents
- Study of Current Interview Based on the Primary Survey-

柳本 哲* 田上由雄* 佐藤広志** 尊鉢隆史* 富田福代*

Akira YANAGIMOTO Yoshio TAGAMI Hiroshi SATO Takashi SONPACHI Fukuyo TOMITA

抄 録

本学教育総合研究所の教員資質に関する研究プロジェクトでは、2007年度に幼稚園小学校を対象に予備調査を行った。その結果についてさらに深く分析するため、2008年度には、教員、保護者、地域の人を対象に聞き取り調査を行うことになった。

本稿では、小学校保護者が重視している3つの教員資質能力に絞って、教員、保護者、地域の人から聞き取り調査をした結果とその考察を述べる。

1. はじめに

本学では、2005年度から人間行動学科にこども学専攻を立ち上げ、保育士資格、幼稚園教諭免許が取得できるようになり、2006年度からは教育福祉学科こども学専攻という学科再編と同時に、小学校教諭免許が取得できるようになった。2007年度からは学部が人間学部から教育学部に学部替えされ、専攻の設置目標がより明確に「教育保育に関わる人材養成をすること」と打ち出されるようになった。

このことに相伴って、専攻の教員を中心として、教員の資質についての研究プロジェクトが2007年度からスタートし、文献調査に加えて、大学近辺の教師、保護者を対象とした質問紙調査(予備調査)を行うようになった。これは、大学教育の中で、どのような資質能力を重視して学生を教育し、教育保育に携わる人材として送り出すのか、その基礎研究とするためである。

ここでは、予備調査¹⁾の結果、保護者が重視している教員資質能力の中で、その割には教師の必要感が少ない資質となっている「子どもの模範となるような言動ができること」「子どもの目線に立ってコミュニケーションができること」「子どもの心のケア・教育相談ができること」の3つについて、教師、保護者、地域を人の視点がどこにあるのかを、聞き取り調査結果から考察する。

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

** 関西国際大学人間科学部 教育総合研究所学内研究員

2. 予備調査結果と聞き取り調査計画

(1) 予備調査結果

予備調査結果は、本学の教育総合研究叢書第1号にまとめられているが、そのうち、調査34項目の教員資質能力について教師と保護者がそれぞれどれだけの必要性を感じているかを一覧表にしたものが表1である。教師が重視する教員資質能力では、第1位は「嘘やいじめに対して毅然とした態度を取る」(87%)、第2位は「子どもの関心を引き出しながら授業(保育)ができる」(78%)、第3位は「自らの資質や能力を高めようとする」(76%)となっている。一方、保護者が重視する教員資質能力では、第1位は「子どもの関心を引き出しながら授業(保育)ができる」(83%)、第2位は「子ども一人ひとりの個性を大切にする」(81%)、第3位は「子どもの目線に立ってコミュニケーションができる」(78%)となっている。

資質「子どもの関心を引き出しながら授業(保育)ができる」のように、教師も保護者も同様に重視しているものがある反面、教師と保護者ではかなり必要性を感じる教員資質能力が異なっているものもあることが窺える。

(2) 聞き取り調査の計画

①調査対象者：

神戸市立A小学校 保護者6名、教師4名、地域の人7名 (聞き取りは各大学側2名)

三木市立B小学校 保護者3名、教師4名、地域の人3名 (聞き取りは各大学側2名)

②調査日時：

神戸市立A小学校・・・2008年12月15日(月)、21日(日)、22日(月) 各約1時間

三木市立B小学校・・・2008年12月8日(月)、24日(水)、1月7日(水) 各約1時間

③調査内容：

次の3項目について、それぞれの立場からこの結果についてどのように考えるかを聞き取る。また、その他の項目も話の流れの中で出てきた意見については聞き取ることにする。

- ・教師が必要性を感じている(約70%以上)が、保護者との差が顕著なもの

No.3 「自らの資質や能力を高めようとする」

No.13 「保護者とのコミュニケーションがとれる」

No.18 「子どものしつけができる」

- ・保護者が必要性を感じている(約70%以上)が、教師との差が顕著なもの

No.8 「子どもの模範となる言動ができる」

No.12 「子どもの目線に立ってコミュニケーションができる」

No.22 「子どもの心のケア・教育相談ができる」

- ・教師、保護者共に意識が低い、新指導要領で導入が決定されている外国語活動

No.33 「国際社会で通用する語学力」

表1 教員資質能力について教師と保護者が必要性を感じている割合 (%)

No.	教師	保護者	差	ランク	教員資質能力の項目
1	73	72	1		子どもをひきつける表現力がある
2	60	50	10		誰とでも協力できる
3	76	52	24	3	自らの資質や能力を高めようとする
4	46	46	-1		幅広い教養を持っている
5	44	44	0		自分自身が夢を抱いている
6	87	75	12	6	嘘やいじめに対して毅然とした態度を取る
7	44	52	-8		あこがれの対しようとなるような人間的魅力にあふれている
8	55	69	-15	-1	子どもの模範となるような言動ができる
9	49	39	10		得意分野を持っている
10	69	81	-12	-5	子ども一人ひとりの個性を大切にする
11	71	77	-6		子どもが好きである
12	66	78	-13	-4	子どもの目線に立ってコミュニケーションができる
13	73	47	26	2	保護者とのコミュニケーションがとれる
14	53	30	23	4	同僚とのコミュニケーションがとれる
15	51	64	-13	-3	教科内容の知識が豊富である。
16	78	83	-5		子どもの関心を引き出しながら授業（保育）ができる
17	69	63	6		授業（保育）技術が身に付いている
18	73	44	29	1	子どものしつけができる
21	35	37	-3		子どもの成長・発達に関する専門知識が豊富である
22	53	67	-14	-2	子どもの心のケア・教育相談ができる
23	69	75	-6		子どもの評価が公正・的確である
24	56	59	-3		子どもの失敗をおおらかに受け止められる
25	36	37	-1		考えたことを実行できる
26	31	13	18	5	情報機器が活用できる
27	67	67	0		教師としての使命感、情熱、意欲を持っている
28	46	36	10		社会の一員として世の中の変化に敏感である
29	66	66	-1		社会的な規範を守る
30	62	65	-3		多様な考え方・見方を受け入れられる
31	29	35	-6		社会に貢献しようという意識が高い
32	29	23	6		地域の実情について深く理解している
33	26	26	-1		地球的規模の問題への関心がある
34	13	9	4		国際社会で通用する語学力

※ 太斜体字は、70%以上の指示があるもののうち、差が大きいもの

(数値は四捨五入した整数値)

3. 結果と考察

ここでは、今回実施した聞き取り調査のうち、保護者が必要性を感じている教員資質能力であって教師との差が顕著なもの、No.8「子どもの模範となる言動ができる」、No.12「子どもの目線に立ってコミュニケーションができる」、No.22「子どもの心のケア・教育相談ができる」について、教師、保護者、地域の人それぞれの立場からの意見をまとめ、考察することにする。

(1) 子どもの模範となるような言動ができること

① 教師による視点

「子どもの模範となるような言動ができる」に対する教員の意見は、およそ以下のようになっている。これらをまとめてみると、自らの行動に対する話はほとんど出てきていないことがわかる。質問枝も「模範」から「規範」へと変化しているようである。自分たちの行動よりも、子どもの行動に焦点が当たり、だんだんと「子どものしつけ問題」へと話題が変化していることも窺える。自分たちは、当然模範的であるといっているようにも感じとれる。

- ・教師はできていると思っているが、保護者から見ると案外模範的ではないのかもしれない。
- ・教師の方には割と低く挙がっている8番は、保護者の方が子どもを中心に考えているということが挙がっているのかなというふうに感じた。
- ・「子どもの模範となるような言動」というのも、子どもから見たときに、きちんと正しいことは正しい、間違っていることは間違っていると教えて欲しいという願いが込められている。
- ・常に学力的にも知識の幅を広げようとする努力も必要で、他にもいろいろ、その下に幅広い教養とかも出てきます。社会的なことにも目を向けて、やっぱり先生が鏡だと言われるように、鏡でないといけないというところもあるのかなと思います。
- ・祖父母のころの先生は、先生と言われただけで頭が下がるような方だったとよく聞きます。
- ・教室の中では、子どもたちを見ていたら、やっぱり先生が教科書であり、生きざまが学習なのだ。
- ・規範意識が親にも薄れているから、別にしつけなんかしてもらわなくてもいいと、先生は理解しているのですかね。
- ・子どもの規範意識が薄れているというのは、もう保護者が薄れているという反映で、こういうデータが出てきているのも、子どもが今その様になってきているからだ。
- ・家の中では困らないから、もう許容範囲がどんどん広がって、その様なことしてたら外へ行ったら困るというのでしつけるわけです。
- ・しつけて、我々の立場から見ると、相手に気を遣うことだと思います。いろんな家庭からやってくる子どもを預かっているわけですから、いろんな環境の子どもたちや個性の違う子どもたちがいます。お互いが学校生活を楽しくやっていくために我慢すること、合わせていくこととか、気持ちのいいコミュニケーションをとるための方法は、絶対必要になってくるのです。
- ・他者を意識しなくなってくるようなことに、我々ははっとすることってすごく多いのです。

- ・テレビ番組に乗るということは、結局それが悪い見本として電波に流れるわけじゃなくて、……てるわけだから、そういう環境の中で道徳を重んじるとか、行儀よくマナーよくやるということを、まず学べる環境がないです。人を殴って、どついて、粉まみれにしたり、そんなことをさせて笑っているわけですから。友達を平気で危ない目に遭わせたり、からかったり、「きしょ」とか言うなど言っても、こっちがパワー要りますよね。まじめがばかにされたり、ヤンキーに格好ええ俳優を持ってきたりとか、どうやって正しさやまじめさを学ぶのか、それを多分、親も一緒になって見えています。だから、何かやっぱり環境としては厳しいです。
- ・子どもの規範となるような言動ができる先生とか、子どもの目線に立ってコミュニケーションをとれるような先生というのを親は期待している。教員の方は、そんなに強く意識されてないと。案外、先生に期待してなかったら、選ばないかもしれません。
- ・親の“規範となる”については、教師らしくということでしょう。言葉遣い、服装をとらえて指しているのではないか。(最近の先生は、ことば、服装が乱れていることを肯定する意見か?)

② 保護者による視点

保護者の意見は、およそ以下のようになっている。これらをまとめると、まず、子どもは先生を模範としてその影響を強く受ける存在であるということである。したがって、教師は親以上に模範となる大人であってほしいという願いを持っていることが窺える。次に、教師が模範となるためには、師弟関係が上下関係にあるべきだが、それが崩れてしまって友達関係、いやそれ以下のなれ合い関係になってしまっている傾向にあるということである。その傾向は、もはや保護者の力では改善も難しい状況まで深刻になっている所もあるようである。さらに、低学年、中学年、高学年と学年が上がるにしたがって、教師はより強く子どもの模範となり、子どもに尊敬されるような存在になってほしいという願いも感じられる。

- ・8番の子どもの模範となるような言動ができるというところですけど、私のうちの真ん中の子ですが、例えば言うと、2年生のときは結構萎縮してたんですけど、3年生の今の担任の先生はすごく少数意見でもどんどん言いなさいとか、何もあなたが考えてることは間違ってることじゃないからとにかく発表しなさいって、すごいすくい上げてくださってる先生なので、もう毎日生き生きと学校に行ってるんです。本当に学校の先生によって、こんなに1学年の生活が本当に変わってくるんだと思うぐらい、この2年を見て思うんです。だから、本当に先生の一言一言ってすごく重要。家で親が言う言葉よりも、結構先生の一言一言ってすごく子どもたちの胸に響いたりしてるんです。親がすごく思ってるけど、先生がそんなに思っていないというのは、もうちょっと考えていただいた方がいいかなと思います。
- ・二言目には先生が言ったからと必ず言うから、親が言って聞かなくても、先生が言ったからって必ず言うので、結構、先生の言うことも神様に近いぐらい大きな、低学年は特にすごく大きなことなので、もし先生が意見を聞いてくれなかったりとか、軽く受け流されたりされてもすごい子どもには大きなショックだったりとかすることがあるので、結構、子どもにとっては先生はすごい大きな存在だと思います。だから何か私はそれにあれかどうかかわからないんですけど、ずっと思ってるのは、今友達みたいな先生が多いじゃないですか。もう本当にため口で、子どもと一緒にお話をする、それが親しみを持っていいんだと言われるんだけど、

私はきちんと先生は先生、子どもは子どもというふうに、ある程度の線引きはさせていただいて、敬語で話すこととか、日常生活でそういうことをきちんと教えていただきたいとは思っています。そうじゃないと、いざというときやっぱりため口でずっとなってくると、高学年になったりすると、急に言うことを聞かなくなって慌てたりとかしても、もう威厳がないですね、しかったりするときに。それはずっと私はもう上の子のときからお願いしてるんですけど、なかなか現実問題としては、もう先生とため口で話をしても、横で聞いている私の方が腹が立ったりとかすることがあるんですけど。だから、それはちょっとやっぱり、先生は先生としての威厳を持って、尊敬できる存在であってほしいとはずっと思っています。

③ 地域の人による視点

今回の3人の対象者は、会社や仕事を引退した比較的高齢者であったため、自分自身の子どもが在籍していないことで客観的立場から発言できる反面、自身が受けた教育に基準をおく傾向がみられた。教師と保護者の双方の立場や考えそれぞれに対して理解を示し共感するとともに、冷静な視点で批判も加えている。

まず、教師に対する保護者の「子どもの模範」という期待や教師の人間性の成長に対する期待に共感を示す発言があった。

- ・教師と保護者を比べまして、やっぱり保護者は的を得ているなという、そういう感じがしました。というのは、やっぱり立場というのは、子どもの模範となるような言動ができていう。やっぱり、子どもは大人を見て育つというか、やはり一番長く平日では教師と一緒に過ごすわけですから、教師次第によってはそれに感化されるというか、そういう部分があるんじゃないかなという、そういう感じで。結構これは、保護者の方が合ってるんじゃないかと思いますね。
- ・今、Kさんがおっしゃったような、名前言うたら申しわけないけど。それと共有するところが、3番目に教師の方が言っておられる、みずからの資質や能力を高めようとする。その資質や能力をどういう面で、具体的にじゃあ自分がどのような資質・能力を高めようとしているのかというところの具体論が、心もあるんでしようけども、ここには全然見えてこない。それをやっぱり、いろんな個々人の主体性に任されているのか、あるいは上の方からこういうふうに資質を養いなさい、自己啓発しなさいよと、その中に一つ保護者がおっしゃっている、子どもの規範となるような人間性も身につけてくださいよとか、学問とかいろんなもんで言うてるんか。(略)

その一方で、保護者とは別の客観的な立場で、調査には表れないであろう教師の内面を推測する発言があり、教師に対する理解も見られた。

- ・むしろ8番は、これも親の方から見たら、子どもの模範となるような言動ということで、先生はそれはもちろん気にはしてるんだけど、なかなかそれは書けないと。子どもの模範となるような言動というのは、もちろん自分はしているという意識は結構あるんじゃないかと思うんですよ、向上心も高いし。だから、こういう差ができていうのは、僕は問題に余りする必要はないと。

(2) 子どもの目線に立ってコミュニケーションができること

① 教師による視点

保護者の期待がどの辺りにあるかは、教師自身も敏感に感じ取っている。次のような発言が代表的なものである。

・子どもの目線に立ってコミュニケーションができるというのは、親からしたら、自分の子どもの味方に立ってくれるという認識なんじゃないかと思いますね。(中略)やっぱり自分の子がかわいいから、例えば自分の子どもが悩んでいたらかわいそうだから、悩んでいるときにはちゃんとそれに寄り添うてあげてねとか、自分の子が弱い立場になったり、何かなったときには、ちゃんと先生が味方についたってな、みたいなね。僕はそういう認識なんじゃないかなと思いますね。

「まず自分の子どもを見てください、自分の子どもの言い分を聞いてください」という要望が強くあることを教師自身も、共感的に理解していることがわかる。だから教師も、自分が受け持つ児童とのコミュニケーションは大事にしようとしているのも窺い知れる。ただし、そこで「子どもの目線に立つ」ということの意味をどうとらえているか。ここに保護者との観点のズレを教師は指摘する。友達感覚になることを教師は望んでいないし、望ましいとも思っていない。それは対応する学年によっても違うだろうという発言もある。次のような発言も興味深い。

・子どもの目線って、私が採用試験で言ったときも突っ込まれたんですけど、目線って何やねんというのが難しいなと。親はきっと子どもと同じ立場になって、子どもと同じように遊び回ったり、楽しく楽しくとか、そういうふうにしていらっしゃる面が多いからこうなるのかな、こういう数値が出るのかな(=保護者のアンケートで教師への要望が高い項目であること)と思うんですけど。もちろん、休み時間なんかはそうやって一緒にわっと遊んだり、ムキになって怒ったりすることもあるけど、何か先生としてというか、いつも何か考える面では、子どもの目線でいつも立ちっ放しじゃだめなのかなと感じるから。

教師としては、子どもたちが成長して社会に出て行くときに、周囲の人々とのコミュニケーションをきちんととることを期待して、現在の子どもたちにも接しようとする。そこには教育的配慮が間違いなく存在する。「子どもの目線」に降り立つといっても、常に子どもと同レベルで会話することを意味しない。次のような発言が象徴的である。

・家庭では一対一で話をしている、そんなに感じないのかもしれないですけど、やっぱり集団でいたら、返事をしないとか、普通にぼんぼんと友達みたいに先生と話をするというのは、授業とほかの場合とでは違うからねと。社会に出たらこうじゃないんだよとつい私は考えてしまって。特に、中学校なんかへ行ったらもっと上下関係というか、そういうのもできるし、何かそんなのを考えながら自分が経験したのを考えると、返事できたり、年上の人にはちゃんと、同じ同級生に対しても呼び捨てで呼ぶんじゃなくて、ちゃんと「さん」で呼んだりするのとかというのは、すごい求めてしまうんですけど。

また別の教員は次のように語っている。

- ・やっぱり教師という仕事なんだから、指導的にしっかりといろんなことをしつけていかなければならないという使命感、やっぱりきちんとさせていかなければならないという指導観に立ったときに、子どもの目線に立ってコミュニケーションができるという部分は、ある意味、ある教師にしたらちょっと軟弱にとられかねない言葉かもしれないなど。やっぱり教師だから、毅然とした態度で、それはいい悪いじゃなくて、やっぱりそういう部分が教師に必要なんだと。

クラスという集団を束ね、社会性を養うための契機として、子どもとのコミュニケーションの場面が捉えられているといえる。

② 保護者による視点

保護者の代表的な意見は、およそ以下のようになっている。これらをまとめると、まず、子ども一人一人とのコミュニケーションを十分にとってほしい、子どもが喜んで学校へ通ってほしいということが根底にはあるだろうと思われる。しかし、今の先生と子どもとのコミュニケーションは、度を超してなれなれしくなってしまうっており、いつも子どもの目線に立ってしまっているのではないかという危機感を抱いていることがわかる。次に、言葉遣いの問題として、先生を何々ちゃんと呼ぶようなコミュニケーションについては、違和感を感じるだけでなく、高学年ともなると嫌悪感になり、世代の違いではすまされない許容範囲を超えたコミュニケーションであるととらえられている。そして、小学校6年間を通して先生も成長し、子どもの成長に合わせたコミュニケーションを期待しているものと考えられる。

- ・中学年ぐらいのときに、先生のことを何々ちゃんと呼ぶんです。私ちょっとびっくりしまして、けどやっぱり先生としては親しくみんなとコミュニケーションをとるためにそうされてたと思うんです。けど、クラスの子はみんなが何々ちゃん、学年の子みんながその先生を何々ちゃんと呼ぶ。その癖がもう平気になってしまっていて、お恥ずかしい話なんですけど、家でだめだよと言っても、みんな言ってるもんって、もう本当にお友達みたいに親しく先生とお話するという形で。今の学年になったら、その先生のこともちろんと何々先生と呼べない、それを何度こっちが家で先生のお話をするとときに、何々ちゃんとはもう違う先生ですから呼びませんが、親しげな言い方で呼ぶので、それは先生だから、きちんと何々先生と、人に話すときであっても何のときであっても呼びなさいと言ってもやっぱりなかなか直らない、もう卒業が近いというこんなときになっても直らなくて、ちょっと本当に先生とのコミュニケーション、これをコミュニケーションと言うのかどうか分かりませんが、その親しいのが。ちょっと、それがやっぱり先生の言うことをなかなか注意しても聞かないって最近ありますよね、そういうのもやっぱり先生はお友達気分子どもがなってる。だから、昔の私たちの時代なんかでも、もう先生というとかちちょっとやっぱりはるか上の方で、違うあれなので先生と呼ぶって、そういう感覚がちょっとうちの子にもないのが最近ではあるのかなという気はします。
- ・低学年では特にそうですね。だから、それがずっと維持されていくためには、高学年になおそれを維持していくためには、やっぱり先生がそれなりに子どもと同じように成長というか、返し方を変えていってもらわ

ないと、低学年のときにがちがちに緊張してる1年生に優しくしていったのと同じように甘い感じて言っていると、やっぱりそれはそれで規律というか距離がどんどんおかしく、下手なときだと逆転してしまうことがあるので。子どもの方が上に立ったようなしゃべり方をしてることもあるので、そこら辺を子どもと一緒に成長と言ったらおかしいんですけど、先生が子どもの成長とともに態度を変えていってもらわないと、多分大人の世界はそんなに、これはしてはいけませんという規律はきちんと線引いてますけど、小学校の6年間って物すごい勢いで成長するので、もうそれを同じような接し方をしていただくと、ちょっとやっぱり困るかなというのはありますよね。

- ・子どもの接し方なんですけどね。うちの子も低学年のときに、すごく子どもの感情とかを酌み取ってくださる先生に受け持ってもらったことがあって、すごく頑張って学校に行けたんです。一つ学年が上がったときに、高学年の先生のようなすごいギャップがあって、1年間すごく大変な時期があったんですね。ですから、子どもの成長とともに変えていくのはもちろん大事なんですけど、余りにギャップがあるのも少し考えよう。その学年に、まあ難しいとは思いますが、学年に合った接し方というのは、みんなである程度考えて合わせておかないと、ちょっと子どもがしんどい思いをしました。先生に求めるのは、勉強のことでもお友達のことでおすごくたくさんあるんですけど、とりあえず毎日学校に頑張っていること、頑張っていること、勉強であっても友達であっても後からどんどんついていくと思うんですよ。だから、とにかく子どもが毎日楽しく学校に行けることが最低条件といえますか、とりあえずそれはクリアしていただかないと、それから先には進めないと思います。

③ 地域の人による視点

地域の人々にとって教師のコミュニケーションは、教師と子ども間はもちろんのこと、教師と保護者間、教師と地域間を含めた広い意味での教師のコミュニケーションの能力を指していることがうかがえる。まず、教師と保護者間のコミュニケーションの違いを指摘している。

- ・言われることは、何となくわかります。イメージが違ってくるんですね、保護者が思っているコミュニケーションと教師が思っているコミュニケーションで、話す内容が何か違うということですかね。
- ・二つのコミュニケーションですよ。子どもとの会話でのコミュニケーションと、保護者との会話で……コミュニケーション。どちらも必要なのは必要だと思いますけれども、どちらも必要ですね。

さらに、コミュニケーションとは双方向の働きかけであるという立場の発言があり、教師と保護者の関係を冷静に客観的に見ていることが読み取れる。教師と保護者の両者に厳しい見方を示している。

- ・割り振りとしてコミュニケーション云々というのは、当然、もう保護者もしかりですし、その辺のことを分擔、しつけにしても同じことが言えると思いますので。学校でできることと、保護者が家庭でできることが必ず分擔されるべきものであるという思いがします。この辺は、できない部分が教師に求められるとかなと思いますね。責任を転嫁するようなことがあっては困るかなというふうに、お互いに、というふうに思います。

また、教師と保護者の意識の食い違いを、どちらが良いか悪いかという視点でなく、考えていることの差異として客観的に冷静に判断したり、また教師の立場を理解したりしている発言があった。

- ・僕が思うのは、やっぱり12番目の、例えば子どもの目線に立ってコミュニケーションができると。このあたりは、これは本当に親の思っていることと、教師が考えていることと大きなやっぱり差があると。この差はやっぱり本当に、じゃあ何を持って子どもの目線に立って物を見ているのかということについて、やっぱり掘り下げて考える必要があるんじゃないかなろうかと。そのあたりの食い違いというのは、かなりやっぱりいろんな原因になってくるんじゃないかという、ちょっと気がするんですね。
- ・13番を見ておっもおもしろいなと思うんですけど。モンスターマザーとかいろいろ、最近非常に問題になっていますね。例えばそのあたりが、自分らは勝手に何でも思いつき、すべて先生にぶち当たると。だから、余りコミュニケーション云々ということを余り気にしていないんじゃないのか、保護者の方は。ところが、先生にしたらもう本当に神経質過ぎるぐらい、そのことを非常に気にしているんじゃないかなろうかなという気がするんですよ。

問題のある保護者の存在や行動を批判する一方で、教師のコミュニケーション能力不足や社会性の欠如に関しても批判を加えている。さらに、地域の視点から、教師や学校が地域との連携が十分でない状況を感じていることや、その連携を通して教師がコミュニケーションを図る手立てがあることも示唆している。

- ・こんなことを言うたら先生に怒られるかもしれない、先生というのは一番社会を知らないとか、よう言われましたね。だから、そういう意味でやっぱり、本当に学校と地域との触れ合いの場というんでしょうか、そういうものを何らかの形で非常に太い線をつくっていかないと、このあたりの差がなくなるんじゃないのかなと思うんですよ。この差というのは、非常に大事な差だと思うんですね。親は親で平気で言うてると、いろんなことをぼんぼんぶち当てていくと。もう全く、モンスターみたいな感じの保護者があると。
- ・それに対して、まともに先生がそれに受け答えているというようなところ。弁護士まで、今苦情処理をやるのにあれしているけど、そのあたりももっと考えたらもっとすんなりと、そんなことせんでも、地域の中でいろいろ先生が訓練しておれば、うまく解決していく方向があるし、また学校側にも地域との連絡をうまくとる先生がおって、何かあったらその人が表に出て、やあやあといって話をつけるとか、何かそういうこともできるんじゃないかなろうかなと思うんですね。

(3) 子どもの心のケア・教育相談ができること

① 教師による視点

子どもの心のケアという観点は、先の「子どもの目線に立ったコミュニケーション」とつながってくる。次のような発言がある。

- ・これ（心のケアないし教育相談）は、何か私は、逆に高く持つというよりは当たり前というか、いつも常に、

特別そこに行くというよりは、いつもしていること、何か当たり前のことなんかだと。どういう心のケア、どういう教育相談、内容はともかく。小さい、今日何か嫌なことがあったとか、今日ええことがあったとかそういうのも含めて。給食のおかずを落として悲しかったとか、そういう小さいことも含めている、いろいろ一緒に子どもとしていくのは当たり前。だから、必要というか、必要性を感じるよりはいつも常にやっていると、特別ここで必要性が重くて頑張らなあかんみたいなポイントというか、そういうふうにはならないのかなというふうに感じます。

しかし他方、「心のケア」といった場合に、想定される問題の軽重ということも含めると、対応の仕方は慎重にならざるを得ない。カウンセラーなどの専門家が学校にも入るようになり、その一方で、教師の日常業務が多忙化を極めることも絡んで、教師の担う業務としては重くなりすぎているという感覚もある。次のような発言が参考になる。

・最近、心のケアということでよく出ますよね。だから、やっぱり我々の認識として、学校にもカウンセラーが必要やと言われてるじゃないですか。そうなってくると、我々がすることに手に負えない部分に入ってきてるというか。だからこそ、やっぱり難しい子どもたちがいっぱい出てきたり、難しい問題を抱えたりしてる子がいる中で、やっぱり我々としてもなかなか難しいと、時間的な部分も含めて、専門的な知識も含めて。だから、そのあたりは本当に外部とかから専門知識を持った方が(入っている)。実際、僕なんかも学校にそういう方が1人いれば、本当に心強いという意識もあるので。むしろ、何か先生自身が心のケアや教育相談のいわゆる能力をもつというのは重たすぎるというか、難しすぎるん違うかなと。

一方で、日常業務の中で当たり前とみなされる面があり、他方で、より専門的な対応が必要なケースの存在を認めるから、教師の集合意識としてのアンケート調査集計では、半数程度が、教師自身の資質能力としての必要性を認めるにとどまったともいえる。

② 保護者による視点

保護者の意見は、およそ以下のようになっている。これらをまとめると、まず、子どもの気持ちをしっかり見てほしい、そして健康に学校へ通えるようにしっかりケアしてほしいということが、根底にある。そして、一人一人の子どもに適したケア、さらにはどの子へも先生の気配りを望んでいるが、實際上、教員にどこまで求められるのか、その限界も感じているようである。そこで、教員集団としての機能を高め、連携のとれたケアや、スクールカウンセラー等の専門スタッフの配置等のシステムの改善が求められている。そして、子どもの状況を見て、側面からさりげない支援をしてもらうことの重要性が述べられている。これは、現在の教員が多忙な業務に追われて、子ども一人一人を十分観察できていないことの裏返しかもしれない。さらに、話は親へのケアともとれる連絡帳や学級通信等への期待も出されている。もちろん、親と教師が協力して子どもを支えるという意味では重要であるが、学校へ一方的に要求を突きつけるモンスターペアレンツが話題になっているように、学校を支えるために労を惜しまない保護者がどれだけいるかは定かでない。

- ・学年ごとの段階を経た対応というのが出ましたけれども、それも一つだろうし、でも、それについていけない子どもたちがいたり、物足りない子どもがいたりとかしたときに、この子はこうだな。例えば、君にはちょっとつらいという言い方おかしいけれども、今ちょっとしんどいよね、でも大丈夫だよと言ってもらえたら、同じしんどいことがあっても、わかってくれてるわというので、学校に行くのがそんなに嫌にはならないだろうし。例えば、これは心のケアとかそういうことに、成長の発達に関する知識とかですよ。それもさっきの話に戻るとやっぱり多過ぎて、それを先生に一人一人見てやってくださいということは非常に難しい。私が究極の中で何を求めますかと言われたら、1人ずつの子ども、個体として見てやってくださいというのは一番の希望ですよ、先生に対して。それを今お願いできるかといったら現状難しい。
- ・すごく目立つ子にはケアしていただけるんですけど、本当に何事もなく普通にしている子にはなかなか先生の声が届かない、声をかけてくださることとか、そういうのが余りないですよ、人数が多過ぎると。本当に極端に働きかけることが多い子とか、黙っておとなしくて全然物が言えないとか、どちらか両極端の方にはすごいケアがあったとしても、その真ん中の人たちには、なかなか先生も心配りが十分とは行き渡ってないような気はしますけど。
- ・それを物理的に何十人もの子たちを見るというのは難しいというのもあるし、先生が一人一人の子たちを本当に気にし出すと、精神的にも多分パンクすると思うんですよ。だから、システム的なことばかり言うと申しわけないですけども、例えばスクールカウンセラーが今でも足りてないから、あそこに相談に行ける場所があるよというシステムがあるとか、その人に先生が相談できて、この人からちょっと何々ちゃんと言って、何かしんどかったと言ってくれる相手がいるとか、例えば1人の先生が1クラス見るのが無理なのであれば。そういうのが進むと、もっと理想的なものになるんだろうなと思いますけど、現状はすごく大変でしょうね。
- ・自分の、例えば学校でこんな、ほんの少しでもつらいことがあったりしたことを、やっぱりどの子どもがそんな先生に素直に言えるとは限らなくて、うちの子でも、そのときは特に転校したてということも、やっぱり学校にまずなじむのに時間が、上の子4年生でしたのでちょっと時間がかかるということも多少あったと思うんですけど。そのときの担任の先生はうちの子に言うんじゃないで、クラスのお友達に声をかけてあげて一言言ってくださったことがきっかけで、すごく仲よくなれたということがあったんですね。そういうのは、学校の様子はどうしても家ではわからないところもあるし、子どももそうやって家で言うとは限らなくて、今なんかは6年生になって聞いても言わないときがあります、親には言いたくない。そういうところ難しいのはわかるんですけど、さりげなく気がついてくださればすごくありがたいかなと思うところはありますね。
- ・そうですね。どこまで求めるかといったら、ちょっとそれはもちろん学校の先生にそんなところまでというところあるかもしれないんですけど、やっぱり家で見えないところにはなってくるので。意外と自分のことじゃなくて、クラスの友達のこととかで自分がちょっと沈んで帰ってくることもなんかあるんですよ。だから、なかなか家で今日は様子がおかしいなと思って、どうしたんと聞いても言わないし、多分言うときには、うちの子なんかもういっぱいいっぱいになって、言わずにおれなくなったときにやっと言うんだと思うんですね。その辺が心のケアというところなのかなと、それに入るかなと思うんですけど。

③ 地域の人による視点

この「子どもの心のケア・教育相談ができる」という資質については、地域の人からの聞き取り調査では、それほど話題に上らなかったといえる。ただ、この資質と関連して、子どもへの教師の指導の不徹底や、いじめへの対応の難しさ、体罰が通用した昔の時代との相違、教師自身の地域とのコミュニケーション力不足から予想される保護者や子どもとのコミュニケーションが弱いこと等が話題に上っている。特に、子どもへの指導に当たっては、子どもを納得させること、自信を持って指導することの重要性を指摘する意見が出されていた。たとえば、次のような意見である。

- ・やっぱり、ものには順序というものがあると思う。
- ・だけど、もう理由さえきちっと、納得できる理由をきちっと生徒に言うてしとったら、こういう理由やからこうやぞと、直しとかな困るからいうことで、いじめに対しても何でもそういう形にしとったら、生徒が帰ってきてうそばかり言わんと思うんやけどね。僕は悪くないのにやられたとかいう形、納得さえちゃんとしとたらね。
- ・そうですね。
- ・全然、その生徒も、こういうふうが悪かったから怒られたんやとか。
- ・やっぱり理解さすということがね。
- ・それを、生徒がやったのでは、それは十分……。
- ・だから、生徒に理解させるというのは、これは先生の一つの話術、技術やさかみに。
- ・指導されるについては、非常に難しいと思いますね。十分自分が指導の自信持った何をしていかないと揚げ足とられると、生徒なり保護者から。だから、時代に即応した生き方をしながら、自信持って指導していかれなかったら難しいと思いますし。
- ・きちっと理由がわかるようにしとって、みんながわかるようにしとって、外から見てもわかるような感じにしとったら、それはそんなに……どうのこうのはないと思うんやけど、そこらのところが不十分な面があるんか何かして、ついついそういうようなのが、逆に言われたあかんからいうて、ついつい遠慮してしまうと。指導の面、指導せないかんのやけど我慢してしまうというふうなところがね。

(4) その他の資質能力

まず、「国際社会で通用する語学力がある」という調査項目について述べる。新学習指導要領では外国語活動、すなわち英語活動が実施されることは周知の事実であるにもかかわらず、アンケート調査結果では、保護者の関心は9%とかなり低いものになっている。このことについて、今回の聞き取り調査で、保護者は下記のように応えている。

- ・国際社会で通用する先生に、ということでは、ある程度必要である。
- ・子どもたちには国際社会で通用するようになってほしいが、先生にそれを求めるという実感がない。
- ・学校の先生は忙しいのに英語も教えなくてはいけないなんて同情する。負担が大きすぎる。小学校の先生自身がそれほど英語の勉強をする余裕がないのではないか。

- ・小学校の先生が英語を教えられるのかと思ってちょっと驚いた。その先生の発音が正しいのか不安な面がある。
- ・下手に教えられたり、変な発音で教えられたりするより、やっぱりネイティブな先生(ALT)が必要である。
- ・英語が必要かどうかと聞かれたら、今の若い世代は、結構海外に関係のある仕事をしていたり経験があったりするが、母親の世代は中学校からしか英語を習っていないので、感覚がもしかしたらちょっと違うのかもしれない。
- ・一般の小学校では保護者は先生に英語の語学力は求めないと思う。
- ・小学校でALTにやってもらっていても中学校へ行けばまた一からでは、効果が上がらない。
- ・外国にはいろいろな良い教育システムがある。そういうシステムを取り入れることは先生には無理としても、そういう知識を持ってもらう方が、語学力よりも大切ではないか。語学力だけでいうと専門の先生がよい。
- ・小学校の英語活動では、子どもたちは楽しめばよいので、先生がそんなに英語が達者である必要がないと思う。もっと大事なことがあるのではないか。
- ・現在、小学校でオーストラリアとの国際交流をやっているが、それで英語が話せるようになるとは誰も思っていない。オーストラリアと交流して向こうにはこんな社会があるのだよ、こういう考え方があるのだよ、こんな人たちがいるのだよ、ということぐらいしか望んでいないように思う。
- ・英語教育自体が日本では変わらないのではないか。中学校との繋がりもしっかりできていない。中学校では楽しめる英語ではない現状では、小学校の先生に求めてみても無理がある。先生も小学校の教師なんだから、そこまで必要なかと感じているのではないか。
- ・小学校の英語活動を中学校の先生も理解することが大事だし、国際社会で通用する英語力というよりは外国の人はこういう考えをしているんだよとか、こういう考えもあるんだよとか、自分とのコミュニケーションのギャップがあるとか、そういうことを学ぶためには、すごく必要と思う。
- ・英語活動や国際交流をしていると、物怖じしなくなり、外人が来たという拒絶反応をしなくなったり、修学旅行先で外国人に英語で話しかける度胸がついたりして、英語がしゃべれなくても何とかなるところから英語が好きになって、英語がしゃべれたらこんなに楽しいことがあるというふうにだんだん入っていく。だから小学生に求めるのは、子どもを取り巻く社会にいろんな人がいるという、受け入れる世界を知るところから始まるような気がする。
- ・日本の中にもいろんな考えがあり、クラスの中にもいろんな子がいて、みんな同じように仲良くやっていけるよね、というところから始まって、言葉が一つのツールとなって広がっていけばいい。

このように、小学校の英語活動については様々な意見が出ている。しかし、英語活動に関心がなかったり反対したりしているわけではなく、必要には感じているが、その実施については中学校との繋がりや、小学校の教師が英語の授業をする不安が見え隠れする。やはり、英語活動についてはネイティブな専門的な力量を持つALTにしてほしいという思いが強く感じられる。

調査結果では、必要とされる教員の資質の順位としては低いですが、これから小学校で実施する英語

活動については、大学の教育課程でも児童英語は必要性が高まってくることが予想される。

インタビューでは、その他「子どもが好きである」「子どもの成長・発達に関する専門知識が豊富である」「同僚とのコミュニケーションがとれる」「情報機器が活用できる」「子どもの評価が公正的確である」という調査項目にも話が広がり、下記のように多様な意見が出た。

- ・「子どもが好きである」という項目が教師が70%というのがどうも悲しい。現状は単に教師を仕事の一つというふうに見ている教師が多いということなのか。その辺が保護者との感覚が違うのか気になるところである。
- ・教師というのは子どもが好きになるだけではだめなのは分かるが子どもを好きであってほしい。
- ・全てのことを先生が一人で見ないと行けないというのはすごく大変である。医療職は、結構分業化が進んでいて、いろんな問題や悩みは、専門的な看護師や専門的な認定を受けている看護師に介入してもらおうとかいろんな部署にこういう人がいるから助けてという信号が出せる。先生はクラスを担当して個人がいろんなことを思っているでもカウンセラーに入ってもらえなかったり、いろんな部署が介入できにくい分野だからすごく大変だと思う。やはり、システムを変えないとだめだと思う。
- ・先生同士の間でも、先輩や年代の違う先生とどれぐらい相談しているのか、どれぐらい話し合っているのか、学校全体でどれぐらい見てくれているのか、保護者として気になる場所である。
- ・何か問題が起きたときに担任にいても、主任の先生が知らなかったりすることが多々ある。主任に言っても回らなかったり若い先生にお願いしても上に上がらなかったり、その間の先生同士のコミュニケーションも時間がないのだろうという感じである。システムの各学年に2人ぐらいの副主任を置くしかない。そうしないと先生自体がパンクするのではないかと。資質も大切であるが人数を増やす方にシステムを変える方が子どもたちには良いのではないかと。一人の先生で受け持つとどこにも逃げ場がないという環境は子どもにとって酷いような気がする。不登校とかいじめとかそういうものもあるので、どこか逃げ場を作ってあげたいと思う。また、カウンセリングのように構えなくても誰もが気軽に相談できる場所があっても良いような気がする。
- ・項目にはないが、保護者として大事なのは、子どもの前で先生の悪口を言わないということである。先生にいろんな能力の差はあると思うが学校の先生に従うということは身に付けてほしいと思う。
- ・子どもの評価が公正・的確という点では、子ども自身がみんな平等に扱ってもらえると思うのが大切で、自分は先生に嫌われているのではないかと不安で学校生活には大きいことだと思う。先生に自分で訴えられない子と訴えられない子がおり、先生のちょっとした言葉や態度が子どもに大きく響くことがあると思う。敏感な年頃になると余計そうだと思うので親も不安になる。

保護者の意見は、子どもを通して学校生活全般にわたり、教師への信頼や願いが強く出ている。また、保護者が必要と考える教員の資質能力について、焦点を絞って調査するのか、幅広く調査するのかによってかなり違った結果が出るように思われる。

4. おわりに

保護者が重視する教員資質能力3つについて、教師、保護者、地域の人の視点を聞き取り調査したが、要点をまとめると、およそ次のようなことがいえる。

第一に、「子どもの模範となるような言動ができること」については、保護者は本来の理想の姿を求めており、地域の人はそのことに共感を示しているが、教師は当然のことだからと敢えてこの項目を選択していない傾向にある。現状では、人間関係が上下から友達、馴合いへと変化し、この資質を実現することが難しくなっていることも指摘されている。

第二に、「子どもの目線に立ってコミュニケーションができること」については、保護者は子ども一人一人とのコミュニケーション、学年の成長に即したコミュニケーションを望んでいるが、教師には子どもの目線に立つとはいってもやはり指導者としての視点、子どもと同レベルではいけないという視点もあり、この資質を選択することに躊躇がある。地域の方は、教師と子どもとのコミュニケーションを問う以前に、一般的に、教師のコミュニケーション力、社会性の欠如を問題視しており、教員が地域にうまく溶け込んでいない現実に視点が向けられている。

第三に、「子どもの心のケア・教育相談ができること」については、保護者は一人一人の子どもの心を理解し適切なケアを望んでいるものの、教員の負担の大きさにも気づき、スクールカウンセラー充実等のシステム改善を求めている。教師は、一般的な子どもの心のケアは当たり前と考えると同時に、専門性が求められるケアについては負担が大きく敬遠している傾向にある。地域の方は、この資質についてはあまり注目しておらず、昔の教員と比較して指導力が弱くなっていること、子どもを納得させることの重要性を指摘している。

今回の聞き取り調査で得られた知見をもとに、本研究プロジェクトで来年度実施予定の本調査を進め、本学学生を対象とした教員養成に生かして行きたいと考える。

注・引用文献

- 1) 佐藤広志, 進藤正洋, 田上由雄, 成田信子: 「教師の資質能力に関する調査—小学校予備調査の結果分析—」 関西国際大学 教育総合研究叢書 第1号 2008年3月 63-94頁

Abstract

Project of Research Institute for Education conducted a preliminary questionnaire inquiry on the competence and ability of teachers at kindergartens and elementary schools in fiscal year 2007. In order to further deepen the analysis, interview was made to teachers, parents and local people in fiscal year 2008.

In this paper, three competence and ability of teachers respected by elementary school parents were focused and discussed based on the above mentioned interview.